



最優秀賞

長野県 長野遊技場組合
「東日本大震災復興支援献血活動
(日赤血液事業支援)」事業



長野遊技場組合 組合長
江本日東さん(左)
前組合長
竹内良美さん(右)

選考理由

社会貢献活動審査委員会
委員
永井多恵子氏



長野遊技場組合は、平成20年には血液運搬車を日赤に寄贈するなど以前から日赤血液事業への関心が高かったが、23年には3・11東日本大震災で被災し、治療を必要とする人々を支援する目的で、金銭ではなく、組合員自らが献血活動を2回にわたり行った。組合員ホール駐車場に献血車を配置し、傘下の経営者・従業員などが献血する姿に感銘を受け、遊技客も献血に参加するなど、社会貢献への意識を地域に広めたことは高く評価できる。

合い言葉は
“命をつなげよう。勇気と愛で、
あなたも献血ボランティア”

献血で被災地とつながり、支えよう

2011年8月3日。猛暑の中、長野遊技場組合傘下のホール経営者や従業員等、組合員約100名が集まり、東日本大震災被災地支援のための献血活動に参加した。関係者のホール駐車場に停まった献血車はフル回転したが、混乱もなく献血はスムーズに進み、献血量は38,000ミリリットルに達した。

東日本大震災の直後から、被災地を支援したいという要望が長野遊技場組合員の中からも多く聞かれていた。前組合長の竹内良美さんは「献血を行うことで、命を支える血液とともに、心も通うと感じていましたので、被災地と結ばれる献血を選んだ」と語る。もともと同組合は、これまで社会貢献活動の一環として、長野県赤十字センターへ献血運搬車を寄贈するなど縁もあった。また全日遊連の被災地支援項目に「献血活動への積極参加」が掲げられていた。

そこで、「命をつなげよう。勇気と愛で、あなたも献血ボランティア」を合い言葉にした活動が企画され、毎月行われる定例会議で承認を受けた。

さっそく赤十字センターに打診したところ、血液が不足しがちな夏場と冬場にお願いしたいという返事があった。酷暑の中での献血となったのはそうした理由からだ。

同組合加盟店39店舗にはあらかじめ「献血ご協力をお願い」の通知が送られ、事務局が採血時間の割り振りをしていった。当日も全員が協力的だった。

「たいへんチームワークがよかったと思います。また若い人が多いのですが、貢献活動の意義を感じてくれたようです」と現組合長 江本日東さんは満足そうに語る。献血自体初めてという参加者も多く、少し敷居の高かった献血に参加したことで、これからは自主的に参加したいという声もあがった。

大きな反響に、次年度以降の継続を検討

同組合では年が明けた1月24日にも2回目の活動を行っ



ホール駐車場で献血活動を実施



組合傘下のホール経営者・従業員ら約100名が集まった



遊技客も飛び入りで参加する等、組合全体として有意義な活動となった



献血に参加した組合員からは自主的に参加したいという声もあがった

た。気候の厳しい季節はやはり血液が不足するのである。参加者の交通の便を考え2回目は場所を変えたが、朝9時から午後3時30分の間に91名が参加し献血を行った。また事情を知った遊技客が飛び入り参加するなどして、献血量は31,200ミリリットルになった。

長野県赤十字センターからは「安全な血液を大量に供給していただき感謝する」旨の感謝状が寄せられた。センター関係者からの評価は非常に高く地元長野新聞でも報道され、組合員たちにとっても有意義な活動になった。

江本組合長は、「普段は顔をあわせない組合員ですが、100名近くがひとつの目的でつながったという意識もでき

ました。今回の顕彰を受けたこともあわせ、社会貢献活動へのモチベーションも高まったと思います」と分析する。

また献血には別の側面もある。組合員の健康チェックや意識の向上にもつながるのだ。夏の例でいえば104名が受付をしたが、8名は献血のできない不適格者だった。血圧が低い、血液の比重が低いなどがその原因だが、該当者の中には今回初めて知ったという人もいた。また献血ではその後に血液成分を告知してくれる。

さまざまな面で成果をあげたことから、江本組合長は「1年限りではなく、毎年の開催を求める声もあがっており、毎年の開催とそれ以外の支援も続けて行きたい」と話した。